

「援助交際」体験者の逸脱キャリア

仲野由佳理

【要旨】

本論文は、逸脱行為の継時的変化を説明した Becker の「逸脱キャリア」を援用し、未体験者が「援助交際」体験者として変容していくプロセスを「援助交際」体験者へのインタビュー調査によって明らかにすることを目的とする。

分析の結果、初回の「援助交際」に対する肯定的な解釈が、行為の継続への動機づけとして作用することがわかった。継続の過程で、「援助交際」をめぐる3つの学習（「援助交際」の技法の学習、技法と成果との関連づけ、個別的な楽しみの発見）が行われ、「援助交際」体験者としての適切なふるまいが獲得される。また、「援助交際」に対する個別の「楽しみ」を発見することで、動機をめぐる語りも発展した。

学習に際しては、「援助交際」に関する漫画や雑誌、インターネット上の情報など、不特定多数にむけて発信される情報が行為の準拠枠として参照された。ここから、「援助交際」における逸脱キャリアは、“対面的な経験者集団との相互作用の機会”をもたずに常習化するが、インターネットなどを中心とする不特定多数にむけて発信される情報や、情報の発信者に含まれる「援助交際」体験者の存在自体が、（経験者集団に代わる）行為の準拠枠としての影響をもつことがわかった。

キーワード：援助交際、逸脱キャリア、継時的モデル

1. 問題設定

「援助交際」は、一般向け雑誌では1993年10月6日号『SPA』で、新聞記事では1994年9月20日の朝日新聞で取り上げられて以降、90年代を中心に流行したといわれている（村松・佐藤（佐久間）・苫米地・平野・岡井 1999, 圓田 2001）。伝統的な女子少年の逸脱イメージ——「不良少女」による性的逸脱——とは異なり、「「ふつうの女の子」が金品を介在した性的サービスを提供する」（とされた）ことへの衝撃は大きく、当時、ある種のポスト近代性を反映する象徴的形象として、現代思想・社会学の分析的欲望を大いに刺激したのだった。

他方で、「援助交際」体験の実態に関する社会学的調査分析は、必ずしも十分な蓄積がなされていない（仲野 2007）。しかしながら、とりわけ宮台と圓田による動機の類型論は、「援助交際」の売る側である女性（以下、「援助交際」体験者）への“インタビュー調査”を通して、当事者の言説から“経験的”に導き出されたという点で、我々の「援助交際」理解に決定的な影響力を持ったといえよう（仲野 2007, pp.294-298）。調査の結果、宮台（2000, p.117）は、金品の獲得を目的とする純粋物欲型、「自分がただの劣等生やダサイ優等生じゃないことを確かめたい」変身願望型、「厳しすぎる親やかまってくれない彼氏に対し“ごまあ見ろ”的に当てこする」心理的反抗型、「家や学校でのムシャクシャや心の隙間を衝動買いの継続で埋め合わせる」気晴らし代型、「町を居場所にするのに必要なクラブ代・カラオケボックス代や、街の仲間に溶け込むためのコスチューム代を稼ぐ」居場所代型、「多くの男性と知り合いたい、もっと社会を知りたい」コミュニケーション願望型の6類型（後に下位類型としてギャル系とアダルトチルドレンを意味するAC系の2類型を追加）を、圓田（2001, pp.13-14）は「援助交際を効率のよいアルバイトとしてとらえる」効率追求型、「援助交際を金品と性的快楽の獲得行為として位置づける」欲望肯定型、「自己の内面（mentality）の欠落を補完するために援助交際をする」内面希求型の3類型（後に、下位類型のAC系をメンヘル系と修正し、4類型目として上位類型に追加）を、それぞれ抽出している。

しかし、動機の類型論が「援助交際」に至る背景のすべてを解明したとはいえない。なぜならば、類型論は行為に先立って動機が存在するという前提を共有するため、行為の継続にともなう“動機の動態性”を見過ごしているからだ。例えば、ある時点において「援助交際」の動機を「ムシャクシャして」と答えつつ、別のある時点において「お金のため」と語る「援助交際」体験者は、類型論の中で居場所を

失うことになる。この限界は、実は類型論者たる宮台と元「援助交際」体験者である山崎との以下の対話に如実に表れている。山崎は「援助交際」に至るきっかけを「はじめて援交したときは、せっぱつまってまともな判断ができる状態じゃなかった。しかも相手が強引な人だったから、もういいやって。」と説明したが、宮台の「なんで続けようと思ったのか」に対しては、「セックスがお金になるというのを認識しちゃったから、どうせやるならお金がほしいな、と」語る（宮台 2006, p.147）。つまり、ここでは「援助交際」に至る明確な動機は説明されず、むしろ後続の継続過程において動機が自覚されているのである。ところが、類型化により、こうした動態性は排除され、「援助交際」継続プロセスにおける当事者アイデンティティの変容過程は不可視化されてしまう。

加えて、動機の類型論は「援助交際」に対する社会的認識の構築過程において、数少ない経験的研究であるがゆえに大きな役割を担った。仲野（2007）は、「援助交際」に対する社会的認識が「病理的なもの」へ収斂し、それ以外の観点からの解釈が困難になる中で、動機の類型論はそうした解釈に対する有益な対抗軸となるどころか、彼女らへのスティグマを強化する方向性と共振したと指摘する。

そこで本論文では、動機の類型論とは異なる経験的研究の方途を示すために、動機の動態性に着目し、「援助交際」を継続するプロセスを明らかにすることを目的とする。構成は以下の通りである。まず、分析の理論的枠組みとして、Becker の「逸脱キャリア」概念を援用する理由を述べる（第二節）。次に、調査の概要を提示し（第三節）、初回の「援助交際」から継続に至るまでと、そのプロセスにおける3つの学習、「援助交際」における行為の準拠枠について検討する（第四節）。最後に、本論文の議論をまとめ、動機の類型論とは異なる経験的分析を提示することで可能となる新たな議論の地平を仮説的に提示する（第五節）。

2. 分析の枠組み

では、動機の動態性に着目し、「援助交際」継続プロセスを明らかにするためには、どのような枠組みを用いて分析すべきか。本論文では、逸脱行動の変化を継時的モデルにおいて説明した、Becker の「逸脱キャリア」概念を援用したい。

Becker は「現象認識のためには個人の行動とパースペクティブにおける諸段階・諸変化の時系列を扱わなければならない」（Becker 訳書, 1978, p.35）と指摘する。

確かに、前掲の山崎の語りから浮かび上がる動機の動態性も、初回と継続の連続

性に着目することで明らかとなるが、「時系列」を扱うだけであれば、社会反作用過程の分析において Lemert (1951) が指摘した、「第一次的逸脱」(primary deviation) から「第二次的逸脱」(secondary deviation) へ」という図式で十分である。では、なぜ「キャリア」(career) 概念を用いるのか。職業研究で用いられるキャリア概念を使用することにより、その地位間移動を左右する諸要因(社会構造という客観的事実、個人の有するパースペクティブ・動機づけ・欲求の変化)を焦点化し(Becker 訳書, 1978, p.37), 偶発的な逸脱から持続的な逸脱へ導かれる過程における、逸脱的な動機と関心の発展、学習と動機づけのメカニズムを明らかにできるからである。例えば、山崎の「セックスがお金になるというのを認識しちゃったから」は、性交が金品と交換可能であるという学習と、得られた報酬(=金品)による継続への動機づけ(「どうせやるならお金がほしい」として解釈できる。

さらに、キャリア概念を用いることで、「援助交際」体験者と経験者集団の相互作用の様相を明らかにできる。分化的接触理論(Sutherland and Cressey, 1939)に代表されるように、犯罪行為の発生における経験者集団との相互作用の影響は甚大である。それは、「援助交際」においても例外ではないが、「援助交際」体験者は、経験者集団との対面的なコミュニケーションの機会をほぼ持たないにもかかわらず、「援助交際」に関する類似したテクニックを獲得するに至る。それは、いかにして可能なのか、そこに、いかなる“行為の準拠枠”が存在するのか。Becker が指摘する経験者集団の役割や機能との対比において明らかにできるはずだ。

3. 調査の方法

調査は、「援助交際」体験者に対するインタビュー調査と参与観察の二つの方法で実施した。調査期間は2005年11月から2009年7月まで、調査対象者は関東・関西を中心に「援助交際」を行っている中学生から高校生までの計7名である。対象者のうち、Aは2006年5月から2009年7月までの3年間に、継続的なインタビュー調査と参与観察を実施した。B～Gは、2005年11月から2006年11月までの1年間に1回から5回までインタビュー調査を実施した。

インタビューの依頼は、以下の方法で行った。まず、出会い系サイト上に掲載された「援助交際」体験者の連絡先へ調査依頼のメールを送った。そこで、調査の概要を説明し、承諾の得られた者から順次インタビューを開始した。なお、インタビュー前に、データの取り扱い等について同意書をかわしている⁽¹⁾。

データの収集は、①テープレコーダーないし IC レコーダーへの音声の録音、②

表 1 調査協力者の属性

対象者	調査期間	インタビュー 回数	初回インタビュー時の対象者の属性			
			対象者の 学歴	「援助交際」 継続期間	ツール	行為内容
A	2006.5～ 2009.7	40	高校生	3 年	出会い系サイト チャット	デート
B	2006.3～ 2006.5	2	高校生	1 か月	出会い系サイト	性行為
C	2005.11～ 2006.5	5	中学生	3 年	テレホンクラブ 出会い系サイト	性行為 デート
D	2006.6～ 2006.11	3	中学生	1 年半	出会い系サイト	デート 下着売り
E	2006.6～ 2006.11	3	中学生	1 年	出会い系サイト	デート
F	2006.7～ 2006.8	2	高校生	1 年	出会い系サイト	性行為
G	2006.8	1	中学生	6 か月	出会い系サイト	性行為

フィールドノートへの記録，③インターネット上の文書（掲載メッセージ，メールの内容）の収集，という3つの方法で行った。対話の様子は基本的に録音したが，調査対象者の希望がある場合には，フィールドノートへの記録のみで対応した。また，調査対象者が「援助交際」相手の男性（以下，「援助交際」男性）とインターネット上でやりとりをする様子や，グループで「援助交際」を行っている対象者同士の対話の様子を，フィールドノートへ記録した。加えて，調査対象者から提供された「援助交際」男性とのメール上のやりとりの一部や，「援助交際」をする時に参考とするインターネット上のサイトや漫画，雑誌などを，補助資料として収集した。なお，調査対象者の初回インタビュー時の属性は以下の表1の通りである。

インタビューは，半構造化インタビュー法を採用し，「援助交際」経験に関する基本的な情報（「援助交際」経験年数，行為内容，「はじめての援助交際」の具体的なエピソード，など）を共通質問項目として設定した。本論文では，主に「援助交際」の動機に関する質問（「援助交際」をはじめてきっかけは何ですか，「はじめての援助交際」はどのようなものでしたか）についての回答を分析に使用する。

4. “「援助交際」体験者” への変容

Becker の提示した「逸脱キャリア」(deviant career) は，既存の規則に対する

無知から生じる非意図的な逸脱行為や意図的な逸脱行為（「最初の逸脱」：第1段階）、逸脱行為が継続し、最初の逸脱では明確でなかった動機が経験豊かな逸脱者との相互作用によって発展する（「逸脱行為の継続」：第2段階）、組織化された逸脱集団へ移行し、逸脱下位文化を形成する（「逸脱下位文化の形成と常習化」：第3段階）という3つの段階で説明される（宝月 1990, pp.32-35）。以下では、初回の「援助交際」に至るきっかけ、行為継続における学習という点から、「援助交際」の逸脱キャリアを検討する。

4.1. 初回の「援助交際」に対する意味づけ

以下では、まず、「最初の逸脱」（第1段階）から「逸脱行為の継続」（第2段階）の過程を検討するために、初回の「援助交際」に至る経緯を検討する。

初回の「援助交際」に至る経緯は、「援助交際」体験者自身を取り巻く環境に関連して語られる。

*：はじめて、〔「援助交際」を〕やってみようって思ったきっかけは

F：きっかけっていうか、友達がいて、友達3人とはじめはやって

*：うん、

F：特に中3のころは、結構、うん、結構荒れてたし、ま、いっかって感じで

(2006年07月28日)⁽²⁾

「援助交際」に至る明確な動機ではなく、「友達3人とはじめはやっていて」「結構荒れていた」などの状況が説明され、最終的に「援助交際」を実行すると決定した時の心境を「ま、いっかって感じで」と説明する。2人1組で「援助交際」を行うDも、同様の語りかたで説明する。

D：私がまだ、この子〔E〕としてないときに、遊ぼうっていわれて、で、ふつうに、ちょっとお金ないねん、っていったら、じゃ、やるかあっていわれて。ちょっと、恐怖心とかは、そのときほとんどなくて、興味本位で。
(中略) なんか、最初に、遊んだりした人が、30分で、1万8000円くれたんで、こんな簡単にお金くれるんやと思って、1回ではまりました。

(2006年6月17日)

「援助交際」体験者の逸脱キャリア

D も“友人の誘い”という突如訪れた「援助交際」の機会に対して、「興味本位で」としか心境を説明しない。むしろ注目すべきは、続く「最初に、遊んだりした人が、30分で1万8000円くれたんで、こんな簡単にお金くれるんやと思って、1回ではまりました」という語りである。これは、初回の「援助交際」における金品の授受を肯定的に意味づけたことで、継続を決断したという内容である。つまり、金品の授受関係にたいする解釈（30分で1万8000円くれる」「こんな簡単にお金くれる」）が、D を継続的な逸脱行為へ動機づけた（「1回ではまりました」）と理解できるのだ。前掲のF も初回の「援助交際」で「10万円」を手にしており、継続を決意する契機として、金品の授受に対する満足感を強調する。

また、A は友人からの誘いではないが、突発的な出来事によって「援助交際」を経験し、やはり金品の授受関係に関する肯定的解釈から継続を決めたと語る。A によれば、以前からインターネット上のチャットを頻繁に使用していたところ、チャットを介して知り合った男性から「会ってみたい」とデートに誘われたのだという。

A：全然、危険とか感じなくて、そのときに会って。(略)で、いろいろデートしたんですけど、[相手が]プランを考えてなかったみたいで、なんか私がデートとかはじめてだし、「どこいく」って聞きあっているような感じになっちゃって。その状態に、相手の方が、あの、申し訳ないなって思ってしまったみたいで、「今日は楽しいデートにできなくて、おわびに、もしよかったら、一緒にショッピングでもしない？」っていわれたんですよ。で、その、「5000円、合計くらいのものであればプレゼントしてあげるから、何か好きなものを」っていわれて。で、そのときだったら、1000円くらいのもも結構大金…だったから、そんなにほしいものないよって、私は思いつつ、結局、買ってもらったんですけど。で、それをきっかけに、こう、なんだろう、掲示板とかを検索すると、結構デートであげますっていうの、結構多いし。(略)で、結構女の子も書いていて、それがきっかけって感じですね。

(2006年5月28日)

この対話でAが使用した“デート”という言葉は、男女2人で外出することを指すものであり、「援助交際」におけるサービスとしての「デート」ではない。Aは意図して金品を受け取ろうと男性と会ったわけではなかったが、男性の「5000円、

合計くらいのものでしたらプレゼントしてあげる」という提案を受けて、それが「援助交際」におけるサービスとしての「デート」であると再解釈した。

初回の「援助交際」経験に対する満足度が、継続へ動機づけたという点では、Aの経験はDやFと同様である。加えて、この語りから、経験の解釈にインターネット上の掲示板が重要な役割を果たしていたことがわかる。「掲示板を検索すると」とあるように、“デートでプレゼントを受け取った”は、「援助交際」目的の男性による「デートであげます」という書き込みによって、“「デート」というサービスの対価を受け取った”と再解釈されたのである。さらに、「結構女の子も書いていて」などの書き込みは、行為への抵抗感を緩和させるなどの効果をもたらしたと考えられる。「そのときだったら、1000円くらいのものも結構大金」というAにとって、その5倍にあたる5000円相当の品物を得るという経験は、DやFと同様、金品の授受関係に対する新たな認識をもたらした行為の継続へ動機づけたと考えられる。

もちろん、すべてのケースにおいて、継続へと動機づけられるわけではない。一度は「援助交際」を経験したものの、経験に対する否定的な解釈によって、継続を断念することもある。例えば、Bは2回目（単独での募集では初回）の「援助交際」で、「援助交際」男性から暴力的な被害を受け、継続を断念した。Bは「興味本位」で出会い系サイトに「援助交際」相手募集の書き込みをしており、こうした初回へ至る心境はDやFと似ている。しかし、暴力的な被害を受け、対価も受け取れなかったという経験は、「精神的にきつかった。友達とかにも、なんか元気ないけどって。(略)身体もなんか、全部が気持ち悪かった」(2006年3月21日)と語るなど、否定的な経験として意味づけられた。その結果、Bは「援助交際」の継続を断念した。

このような「援助交際」における被害は、継続への動機づけに強く影響を及ぼす。続く4.2で説明するように、軽微な被害や失敗は、むしろ継続への動機づけとなる場合もあるが、身体・精神的暴力などの深刻な被害は、「援助交際」からの離脱の動機づけとして作用する。また、直接的に離脱へ結びつかなかったが、他の「援助交際」経験者の被害経験に関する情報が、「援助交際」への関わりかたに影響を及ぼすことがある。例えば、Fは「援助交際」仲間であった友人が被害を受けたと知り、同様の被害を恐れ、性行為を含む「援助交際」をやめたいと語る(2006年7月28日)。

以上のように、未経験者が「援助交際」に至る過程では、その動機は「ま、いっか」「興味本位」(D, F)など明確な動機をとまなわず、あるいは、突発的・偶発

的に直面した出来事として語られる（A）。しかし、行為の継続については、それを「援助交際」だと自覚したうえで、金品の授受に関する満足感を含む肯定的解釈が、継続の動機づけとなることがわかる。逆に、暴力に直面するなどの「援助交際」に対する否定的解釈は、離脱への動機づけとなる可能性を指摘できる。

4.2. 行為の継続に関する3つの学習

この第1段階（最初の逸脱）から第2段階（逸脱行為の継続）への移行に関する重要なメカニズムとして、Beckerは「逸脱的な動機と関心の発達」（Becker 訳書，1978，p.45）をあげる。これは、マリファナ使用者の研究において詳細に考察されているが、逸脱行為から引き出される快楽は、経験豊富な使用者との相互作用によって学習され、それを快楽として認識することを学習すること（テクニックの学習，効果の知覚，楽しみの学習）によって、つまり「社会的に学習された動機によって発生する」と考えたのである（Becker 訳書，1978，p.45）。

「援助交際」体験者に対するインタビュー調査を概観すると、第1段階から第2段階への移行において、様々なメディア（漫画，雑誌，インターネット）から「援助交際」に関する学習が行われ、それによって「援助交際」体験者として適切なふるまいかたを獲得するプロセスが明らかとなる。以下では、Beckerの提示した①テクニックの学習，②効果の知覚，③楽しみの学習，という3つの視点から検討する。

4.2.1. “「援助交際」の技法”の学習

まず、①テクニックの学習である。「援助交際」体験者の多くは、行為を継続する中で、「援助交際」を行うためには様々なテクニックが必要であると認識する。例えば、出会い系サイトに掲載するメッセージの書き方，出会い系サイトを介しての男性とのコミュニケーションの仕方，「援助交際」当日のふるまいかた，「常連」の獲得方法⁽³⁾，「援助交際」体験者であることを隠すための方法，男性から確実に金品を受け取る方法，などである。これらの「援助交際」を行うための技法（以下，「援助交際」の技法）は、主に、漫画や雑誌，インターネットから学習する。例えば，Cは「援助交際」をテーマとした漫画（例えば，芹沢・堺 2004，ももち 1998など）から，プリペイド携帯を使用する，金品を前払いで受け取る，「援助交際」で使用した／購入した衣服を自宅とは異なる場所に保管する，などを学習したと語る（2005年11月20日）。また，Aは「援助交際」相手募集のメッセージを作成する際，出会い系サイトに書き込まれる他のメッセージ⁽⁴⁾を参考にするという。G

も、男性から送られてくるメッセージの中から、提示した条件（金額、内容、男性の性格）にあう男性を選別する技法を説明した際に、「参考になったもの。書き込みかな」（2006年08月11日）と調査者に語る。

このように、出会い系サイトに掲載される「援助交際」相手募集のメッセージは、「援助交際」体験者にとって、閲覧する出会い系サイトにおける「援助交際」の相場（年齢、金額、行為内容）や、「援助交際」におけるコミュニケーションのルール¹⁵⁾を学ぶ、重要な情報源となる。さらに、Dの語りから、「援助交際」に関する情報を提供するサイトも活用されていることがわかる。以下は、「デート」を目的とした「援助交際」で、“男性から金品を受け取る前に逃げられた”という語りである。

D：で、[男性と話が] もりあがってって、で、その人がなんか、タバコとか、用意してって、空の。たぶん用意してたんですけど。それを自然にとりだして、「あ、タバコないわ。買ってくるわ」って、でていって、全然帰ってこなかったんで。全然気づけへんかった。(略) 15分くらいたって、「ちょっと遅くない？」って感じになって、でも、ま、「自動販売機が遠いだけちゃう？」ってなって。で、「もうやばいよな」って。で、そういうこと、前聞いたとったんで、そういうこともあるって、覚悟しとったんですけど。まさか自分がひっかかるとは思わなくてね。(略)

*：そうだよな。相手の食べた分もはらわなきゃいけないもんね。その話を前に聞いたことがあるっていうのは、人から「気をつけな」って[いわれたの?]

D：あ、そうです。あの、友達では、やってる子いるんですけど、学校ではそんな話できないんですけど、その友達からじゃなくて、ネットで。(略) 気をつけなきゃあかんこと、って。なんか、逃げられること「トンズラ」っていうんですかね？その「トンズラ」されへんように、みたいな書いて、あとは制服で会わないようにって、学校とかバレちゃうし。学生証をかばんにいれないようにとって、いろいろ書いて。(略)

*：そっか、そっか。やっぱり、そういう「やられた」みたいなことがあると、「次はこういうところを気をつけよう」となる？

D：それを今考えてるんですけど、なんか、前払いていうのが、ちょっとダメかなって、私的に。だから、自分で気をつけるしかないんですよね。例え

「援助交際」体験者の逸脱キャリア

ば、「タバコ買ってくる」っていわれたら、「じゃあ、私ってきます」とかって

(2006年11月19日)

Dは、「援助交際」仲間であるEと「援助交際」男性の3人で飲食店に入ったが、食事がすんで会話をしている最中に、未会計のまま男性に逃げられてしまう。そのため、「デート」の対価を受け取れなかったばかりか、男性を含めた3人分の飲食代を支払うはめになったというのである。Dは、インターネット上の情報（「制服で会わない」「学生証をかばんにいれない」「トンズラされないように」など）を参照し、今回の経験が金品を受け取る前に逃げられてしまう「トンズラ」だったと理解した。そこで、同じ被害にあわないための方法を具体的に考えている。

以上のように、漫画や雑誌、インターネットなどの様々な媒体を利用して、「援助交際」から利益を得るために、技法の学習が行われていることがわかる。学習の程度は、それぞれの体験者ごとに異なるが、出会い系サイト上に「援助交際」相手募集のメッセージを掲載してから、「援助交際」当日が終わるまでに必要とされる、多様な技法が獲得されている。

4.2.2. 技法と成果の関連づけ

次に、②効果の知覚である。「援助交際」においては、成果（＝効果）を金品や（4.2.3で検討するが）個人的な楽しみとして認識する。例えば、4.1のAのように、行為（デートをする）と結果（金品を受け取る）を結びつけて「援助交際」を理解したなどである。では、具体的に、「援助交際」体験者は、どのような事態を成果として解釈しているのか。ここでは、「援助交際」の技法に関する学習と負（失敗）／正（成功）の成果と関連づけという点から検討する。

前掲のDとEの「トンズラ」の事例では、この失敗の原因に関して、当日までのメールでのコミュニケーションが反省的に語られる。

D：いつもメールする人は、全然顔文字とか使わないひとばかりなんです。早く会いたいから、焦ってるんですよ。でも、その人は顔文字もつけてくれてたし、全然疑いはしなかった。で、すぐ会おうって話にはならなくて、少し雑談して、楽しくなってきたときに、「じゃ、会います？」ってなったんで、いい人やって思ってたんですけど

(2006年11月19日)

D は、この失敗を「たまたま運が悪かった」ではなく、経験に基づく自己判断の誤りと、インターネットからの学習不足が引き起こした結果として解釈する。「顔文字を使わない」、「焦っている」男性とは対照的に、「顔文字もつけてくれた」男性を「いい人」と判断したことは誤りで、それが失敗の一因であるというのである。さらに、前掲（4.2.1）の「そういうこと、前聞いってたんで、そういうこともあるって、覚悟しとったんですけど。まさか自分がひっかかるとは思わなくてね」は、インターネットからの学習によって、危険性を把握していたにもかかわらず、対処できなかったことへの反省的な語りである。つまり、男性に逃げられ「援助交際」の対価を得ることができなかったのは、「援助交際」の技法に関する学習が不十分だったために生じた“負の成果”として認識されているのである。続く、D の「「タバコ買ってくる」っていわれたら、「じゃあ、私いってきます」とかって」（4.2.1）という対策をめぐる語りは、明らかになった学習不足を補うことへの意欲を表す語りとして理解できる。

次に、正（成功）の効果である。4.1で述べたように、初回の「援助交際」から継続へと動機づけられるプロセスでは、“何が「援助交際」によってもたらされた効果なのか”を認識することは非常に重要である。4.1における A の語りは、男性から得た金品が「デート」によって得られた成果として解釈されたものと理解できる。また、同じく D の「30分で1万8000円くれたんで、こんな簡単にお金くれるんやって思って」という語りは、1万8000円という金額が30分の「援助交際」の成果として認識されたことを示している。C も、初回の「援助交際」の感想を「こんなんでお金が入っていいのかなって思った」（2005年11月20日）と語り、特定の行為の対価として金品を受け取ることを「援助交際」の成果として認識する意味は大きい。

これらの正の成果に対する認識は、より高い成果の実現へむけて学習を促進する。例えば、A は出会い系サイトに書き込む「援助交際」相手募集のメッセージについて男性からの返信数が増加するよう、文章の構成や表現に関する学習を欠かさない。返信数の増加は、「援助交際」体験者側の選択の幅が拡大するというメリットを提供する。つまり、自己が重視する「援助交際」の条件をクリアする“理想的な「援助交際」男性”に出会えるかどうかは、選択の幅が広がることで「金額が高い人とか、条件がいい人を選んで送る〔男性に返信する〕」ことができると F が語るように、「援助交際」の成果に関わる問題であるのだ。

そのため、A は、「援助交際」の条件（金額や行為内容など）を、メッセージの

「援助交際」体験者の逸脱キャリア

どこに配置するのか、自己紹介をどのように記述するかなど、使用する語句の一つ一つを吟味する。こうした努力の成果は、書き込み直後から開始される男性からの返信数に如実に反映される。

A：掲示板〔にメッセージを〕書くとメールとか100通くらい〔くる〕。いっぱい〔他の掲示板にも〕書いてるからっていうのがあるんですけど。

(2006年5月23日)

返信数を増加させる具体的な方法として、複数の掲示板に同時に書き込む、閲覧者の多い出会い系サイトから優先的に書き込む(2006年10月22日)などをあげる⁽⁶⁾。

以上のように、「援助交際」の技法に関する学習は、「援助交際」から得られる成果と関連づけられ、正の成果を生み出すという目的において、促進されるといえる。

4.2.3. 個別的な「楽しみ」の発見

最後に、③楽しみの学習である。金品の授受や、「援助交際」男性とのコミュニケーションは、「援助交際」によって生じる成果であるが、“正の成果”を楽しむために固有の意味づけが行われる。こうした楽しみは、行為を継続する動機づけに関わると考えられる。以下では、「援助交際」体験者によって語られた「お金」と「コミュニケーション」に着目して検討する。

まず、「お金」を得ることをめぐる楽しみである。4.1で述べたように、「援助交際」を継続へ動機づけるものとして「金品」がある。先行研究では、短時間高収入という効率性や、拝金主義的購買行動との関連が指摘された(黒沼 1998, 宮台 2000, 圓田 2001)が、以下のFやAのように「貯める」という楽しみかたを発見する場合がある。Fは、「援助交際」で得た金品の主な使い道として衣服の購入をあげるが、一方で「お金、結構貯めたかった」とも語る。

F：私は、お金、結構貯めたかった。数えるのが好きで。(笑う)札束を数えるのが好きで。結構ずっと持ってて、一気に使う。(略)封筒に入れて、で、ファイルにいれて、こうやって(実際に、鞆のなかに封筒をいれたファイルをしまうしぐさを見せる)、で、持ち歩いてるの
(略)

*：数えるのが楽しいと、あのバックほしい、とか、あの洋服ほしいとか。減ったときっていうのは？

F：そのときは，うーん，なんか，ものたりない。常に，お金が入っているのが当たり前になってきて，入ってないと，めっちゃ不安になる

(2006年07月28日)

この「貯める」という行動に対して何らかの楽しみを見出しているのは，Aも同様である。Aは「援助交際」で受け取った金品をほとんど消費することなく自宅に保管している。それらは金額ではなく札束の厚みや量で認識されており，「援交でのお金はコレクション感覚」(2006年10月22日)と語られる。さらに，Cも自宅とは異なる場所ではあるが「ほとんど，貯めてる」(2005年11月20日)と語る。「援助交際」によって獲得する金品は，消費により楽しみを生み出すものとしてだけでなく，貯蓄によっても，「数えるのが楽しい」「コレクション感覚」など，楽しみを生み出すものとして認識されているといえる。

次に，「援助交際」男性とのコミュニケーションをめぐる楽しみについてである。宮台(2000)は「コミュニケーション願望型」という類型を抽出しているが，本調査でも，「援助交際」男性とのコミュニケーションが楽しみの一つとして語られる。例えば，年代の異なる男性との「デート」に新鮮な感覚を抱いたり，「ほめられる」ことで楽しいものだとして認識する場合である(C：2005年11月20日，2006年2月26日)。また，Dは以下のようにコミュニケーションの楽しさを語る。

D：面白そう。とか。最初，あったから，始めて。(略)ま，もらえるんならもらいたいですけど。そんなにお金をがっばがっば稼ぎたいってわけじゃないんで。

*：そっか，そっか。結構，友達と遊ぶ感覚みたいな楽しさがあると

D：そう。で，全然，人見知りしないんで，私は。普通に，初対面の人でも，楽しく話して，それかつ，お金ももらえたら，ラッキーやなって

(2006年11月19日)

調査者が「援助交際」男性とのコミュニケーションを，「友達と遊ぶ感覚みたいな楽しさ」と例えると，Dは「そう。で，全然，人見知りしないんで，私は」と同意している。当初，Dは，金品の授受関係に対する肯定的な意味づけが継続の動機づけであったが，現在の「援助交際」については，上記のように，コミュニケーションの楽しみを第一の動機としてあげ，「それかつ，お金ももらえたら，ラッ

キー」など、金品の授受に関しては第二の動機にとどまる。

また、Aは「援助交際」相手の男性とのコミュニケーションを「将棋や囲碁」、カードゲームで使用される「カード」などに例え、そのゲーム性に楽しさを見出している。さらに、「援助交際」男性のタイプを「サンプル」と呼び、その収集過程を楽しみとして語る（2006年7月4日、2006年10月22日、2007年7月11日、2008年3月29日、ほか）。

以上のように、「援助交際」の成果として認識された「お金」や「コミュニケーション」は、そこに個別の楽しみを学習することで、新たな継続への動機づけとなる。つまり、Beckerが指摘したように、逸脱の過程において動機が発展し、それが行為を継続する新たな動機づけとして作用しているのだと考えられる。

4.3. インターネット上の準拠枠の参照

さて、継続に至る過程に生じる学習や動機づけが明らかになったが、最後に、「援助交際」における逸脱キャリアの最終段階について検討する。

逸脱キャリアの最終段階として、Beckerは、経験者集団との相互作用が及ぼす影響に着目し、「逸脱下位文化の形成と常習化」をあげた。宝月（1990）は、その集団の役割を、第一に「逸脱集団は彼らの立場を正当化ないし合理化する理論的根拠やイデオロギーをもつ」、第二に「組織的集団に移行することによって、逸脱者はトラブルを最小限にして、逸脱行為を継続する方法を学習することができる」と説明する（宝月 1990, p.35）。つまり、逸脱行為の安定化には、「自己の行動についてのみずからの立場と他の社会構成員との相違から発生する問題をめぐって形成される「文化」を共有する経験者集団への加入が重要な役割を果たすと考えたのである（Becker 訳書, 1978, p.117）。

しかし、「援助交際」体験者は、継続の過程で自己の異質性（＝逸脱的な存在としての自分）を自覚するが、経験者とは対面的な相互作用の機会をほとんどもたない。

C：自分、自営業みたいなもんだから、友達とかに内緒にしているんだけど、友達とかが「気持ち悪いよね」とか言ってて…。そういうことをやるのは、気持ち悪いし、おかしいって、みんながいうのを聞いて…。ああ…って。

*：それを聞いてて、それは、自分のことを考えていて？

C：そういうふうに見られるってあるので、ああ…って、

(2005年11月20日)

Cは学校で友人らが「援助交際」を「気持ち悪いよね」と語るのを聞き、「援助交際」に対するまなざしを認識したという。また、Aは「援助交際」に対する“一般的なまなざし”から「援助交際」体験者の異質性（「醜いみたいなイメージ」）を認識している。

A：例えば、世のなかでは、ほとんどのかたは、自分の体であれ、デートだけであれ、お金をもらってっていうのは、うーん、なんていうのかな。醜いみたいなイメージがあると思うんですよ。私もなんとなくその感覚わかるんですけど。

(2006年5月23日)

CとAは、ともに「援助交際」歴が3年以上の“常習化した「援助交際」体験者”であり、異質な存在として自己を認識する。しかし、基本的には常に単独で行動し、対面的な経験者集団へアクセスする回路をもたない。では、友人と複数で「援助交際」を行うD、E、Fはどうか。DとEはペアで「援助交際」を行うが、「友達では、（「援助交際」を）やってる子いるんですけど、学校ではそんな話できない」（2006年11月19日）と語る。また、Fも「援助交際」仲間が2人いるが、他の友人や家族らに「援助交際」が発覚することを恐れ、基本的に「援助交際」仲間とはメールでのやりとりを中心とした関係にとどまる。結局、2、3人程度の仲間集団が形成されたとしても、それは、同時に「援助交際」を経験するグループであって、正当化・合理化のための理論的根拠やイデオロギーを提供するものでもなければ、トラブルを最小限にし、行為を継続するための学習を期待できるものでもない。つまり、「援助交際」体験者の逸脱キャリアの特徴は、“対面的な経験者集団との相互作用の機会”をもたずに常習化に至ることにある。

しかし、「援助交際」をめぐる学習の分析から、「援助交際」体験者らしさの獲得の過程において参照される“行為の準拠枠”の存在を指摘できる。それは、インターネットを中心とする不特定多数にむけて発信される情報である。4.1および4.2で引用した体験者の語りからもうかがえるが、出会い系サイト上に残された買う側と売る側のコミュニケーションの履歴や、「援助交際」を紹介したサイト・漫画・雑誌は、閲覧する者に対して「援助交際」をめぐる様々な情報を提供する（「援助交

際」の技法,「援助交際」から得られる成果,「援助交際」に対する社会的認識など)。あるいは,初回の「援助交際」をめぐるAの語りにみられるように,閲覧した情報が,自己の行為を理解する手がかりとなる(4.1)。「掲示板とかを検索すると,結構デートであげますっていうの,結構多いし。(略)で,結構女の子も書いていて」(2006年5月28日)は,「他の人もやっている」という安心感を提供し,経験に対する違和感を緩和したものと考えられる。つまり,非対面的ではあるが,「援助交際」をめぐる様々な学習や正当化・合理化の理論的根拠に活用されるという点で,対面的な経験者集団の代替的機能を果たしているといえるのだ。

以上のように,キャリアの最終段階における経験者集団との相互作用はBeckerの指摘とは異なり,インターネットを中心とする不特定多数にむけて発信される情報や,情報の発信者に含まれる「援助交際」体験者の存在自体が,学習過程において(経験者集団に代わる)行為の準拠枠としての影響をもつことがわかった。

5. 結語

ここまで述べてきたように,Beckerの逸脱キャリア概念を援用することで,未経験者が「援助交際」体験者として変容するプロセスが明らかになった。初回の「援助交際」に対する肯定的な意味づけが,継続への動機づけとして作用し,学習(「援助交際」の技法の学習,技法と成果との関連づけ,個別的な楽しみの発見)を通して,「援助交際」体験者としての適切なふるまいが獲得される。さらに,個別の「楽しみ」が発見されることにより,動機をめぐる語りも発展したのである。

一方で,Beckerが指摘した経験者集団との相互作用が,対面的には行われず,代わりに,非対面的に形成される行為の準拠枠を「援助交際」をめぐる様々な学習や正当化・合理化の理論的根拠として参照することがわかった。これは,準拠枠への接触の機会があれば,誰でも関連する学習を行い,合理化・正当化の理論的根拠を得られることを意味する。情報化が進み,パソコンや携帯電話から容易に準拠枠を参照できるようになった現代社会においては,逸脱行動の安定化を支える経験者集団は,インターネット空間において,その機能を果たしていると考えられる。

最後に,得られた知見が「援助交際」からの離脱をめぐる研究に応用できる可能性として,継続のプロセスと同様の観点(学習と動機づけ)から,離脱のプロセスも説明できると考える。例えば,被害経験にともなう否定的解釈(4.1)や「十分な成果(=金品)を得られない」などの失敗経験は,離脱の動機づけとなるだろう。しかし,この情報化社会において,学習と動機づけを支える行為の準拠枠が,イン

ターネット空間に存在する以上、そこから「援助交際」体験者を引き離すことは困難な課題である。つまり、「援助交際」に特徴的な「集団性」を踏まえた離脱研究が行われるべきなのである。もちろん、これには異なる経験的データの蓄積が必要であるのはいうまでもなく、次なる課題として検討していきたい。

〈注〉

- (1) 初回のインタビュー時に、調査の内容、公表にあたっての匿名性の確保、データの保管・破棄に関する取り決めについて告知の上、同意書を作成した。また、必要に応じて、相談機関に関する情報提供などのフォローを行った。
- (2) 以下では、「*」を調査者、アルファベットを調査対象者とする。また、括弧内はインタビューを実施した日である。引用するやりとりでは、筆者による補足を“〔 〕”内に、そのときの様子を“()”内に記す。
- (3) 同じ相手と継続して「援助交際」を行う男性は、「常連」あるいは「リピーター」と呼ばれ、安定した収入の確保・リスク回避という点から重要視される。
- (4) 各出会い系サイトのシステムによって異なるが、①書き込んだ側のメッセージのみが記録される、②双方のやりとりの一部が記録される、の2つのケースがある。
- (5) 暗号化されたメッセージを適切に解読し、スムーズに男性とコミュニケーションする能力や、「サクラ」と誤解されないような記述の仕方が必要とされる。
- (6) 例えば、A が一か所にメッセージを書き込んだ場合、およそ3～4分間隔で男性からの返信がある（2006年9月2日：フィールドノート）。時間の経過とともに返信数は減少するが、複数に同時に書き込めば、最終的に相当な返信数を確保できる。

〈引用文献〉

- Edwin H. Sutherland・Donald R. Cressey, 1974, *Criminology*, 9th Edition, J. B. Lippincott Company (=1964, 高沢幸子・所一彦訳『新版 犯罪の原因』, 有信堂)
- Edwin M. Lemert., 1951, *Social Pathology*, McGraw-Hill.
- 宝月誠, 1990, 『逸脱論の研究』 恒星社厚生閣.
- Howard S. Becker, 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Free Press.
(=1990, 村上直之訳『新装 アウトサイダーズ ラベリング理論とはなにか』)

新泉社.)

黒沼克史, 1998, 『援助交際』 文藝春秋

圓田浩二, 2001, 『誰が誰に何を売なのか?—援助交際にみる性・愛・コミュニケーション』 関西学院出版.

——, 2006, 『援交少女とロリコン男 —ロリコン化する日本社会』 洋泉社.

宮台真司, 2000, 『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方—』 朝日新聞社.

——, 2006, 『制服少女たちの選択 After 10 Years』 朝日新聞社.

ももち麗子, 1998, 『いたみ いじめ—少女たちの心の叫び』 講談社.

村松泰子・佐藤（佐久間）りか・苫米地伸・平野亜矢・岡井崇之, 1999, 「大人向け雑誌における『女子高生』の性的商品化と思春期女子の性行動の変化に関する研究」厚生科学研究費（子ども家庭総合研究事業）研究.

仲野由佳理, 2007, 「援助交際—『援助交際』体験者のナラティヴ—」, 本田由紀編『若者の労働と生活世界—彼らはどんな現実を生きているか—』 大月書店

芹沢由紀子・堺湊, 2004, 『デザート KC わたしのからだ, わたしのねだん』 講談社.

ABSTRACT

***Enjo Kosai* as a Deviant Career**

NAKANO, Yukari

(The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University)

Email: y-nakano041001@hotmail.com

The objective of this paper is to reveal the process through which individuals begin to engage in *enjo-kosai* (paid dates) based on interviews with individuals with such experience, based on Becker's notion of "deviant career."

As a motivation that leads individuals to continue to engage in *enjo-kosai* even after their first experience, a very important factor is whether they recognize giving or receiving money as right conduct or not. In addition, the motivation can be transformed and developed by the following process of learning: (1) learning the "techniques of *enjo-kosai*," (2) associating those techniques with outcomes, and (3) the discovery of private "pleasure."

In this process of learning, individuals who have engaged in *enjo-kosai* refer, as frames of reference, to *manga* (cartoons), magazines, and information on the Internet where *enjo-kosai* is described.

In particular, websites on which *enjo-kosai* itself is introduced, along with some "Deai-Kei" websites' forums where conversations between buyers and sellers are on display, make communication between men and women in *enjo-kosai* visible and clarify appropriate ways of behavior for individuals engaging in *enjo-kosai*. In this sense, those websites seem to be alternatives to "interaction with deviants who are rich in experience," in which Becker places great importance for understanding the development of action and motivation.

Individuals engaged in *enjo-kosai*, however, do not construct any relationships with others engaged in the practice in spite of seeing themselves as deviants through interactions with others who do not engage in the practice. In summary, people begin to involve themselves in *enjo-kosai* without any direct interactions with others engaged in the practice.

Keywords: Sequential models, Deviant career, Enjo kosai